上海時代

1892年に江蘇省の清和県（今日の淮安）に生まれた郎静山は、12歳のときに上海の図画教師から写真を学びます。1912年には上海の新聞社『申報』に就職し、広告や新聞写真の仕事に携わりながら、芸術写真を発表するようになります。

ちょうど1920年代の中国は、商業的な肖像写真とも、報道のための記録写真とも異なる、絵画的な構図や個人的な内面の表現としての、アマチュア作家による芸術写真が勃興した時代でした。郎は、北京の「光社」に続いて1928年に上海で設立された「中華撮影学社（華社）」に参加し、制作のみならずその人脈や広告業の経験を生かして、芸術写真の普及のために大きな役割を果たすことになります。

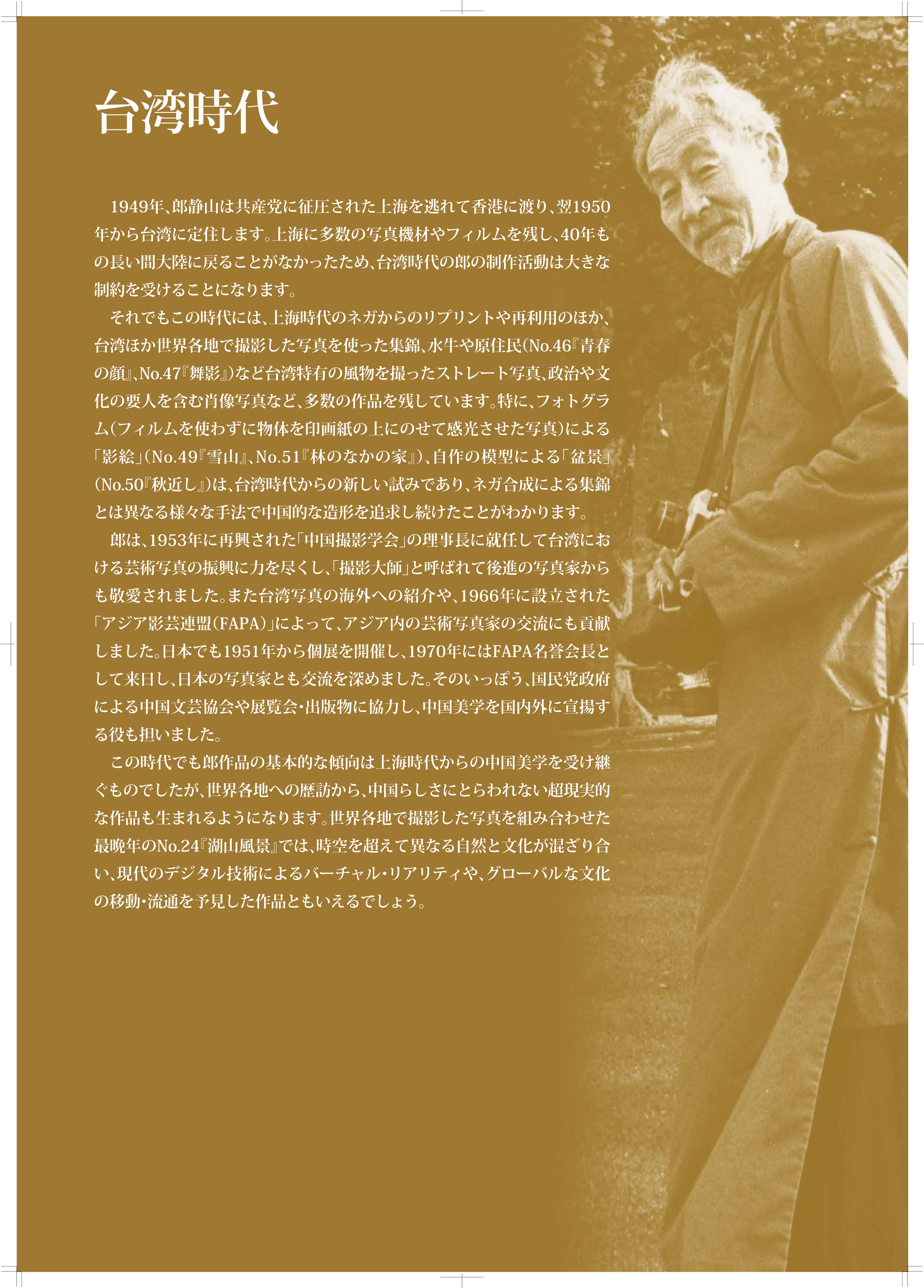
このような芸術写真の隆盛を支えたのが、1920～30年代の上海におけるビジュアル重視の雑誌の流行です。画報誌『良友』『時代』や『上海漫画』などは、近代美術、ファッション、建築、漫画、そして写真など、当時の先端的な都市文化を紹介し、郎もしばしばこれらの雑誌で作品を発表しています。

上海時代の郎の作品は、①抒情的なストレート写真による風景、②集錦風景、③都市とファッション、④裸婦、⑤肖像など、きわめて多様なテーマを扱っています。もっぱら伝統的な中国美学を追求したと思われがちな郎も、この時代には、都市のダイナミックな景観や最新ファッションの女性像など、コスモポリタン都市・上海ならではのモダンな写真を制作していました。しかしこれらの作品の多くは、当時の雑誌に掲載されたものを除いて、現在では見ることができません。

そのいっぽう、郎は1931年の東京での「国際写真サロン」をはじめとして、世界各地の国際写真サロンに作品を送り続けました。郎や同時代の写真家たちが欧米での発表をめざしたのは、芸術としての写真作品への評価を求めただけでなく、欧米列強が中国に抱く後進的なイメージを払拭して、中国の自然や文化の価値を世界に訴えようとする使命感からでした。

このコーナーの前半で展示している作品の多くは、ストレート写真による、絵画的な構図を求めたものです。ソフトフォーカスによるNo.10『山道を帰る農夫』やNo.12『夕暮れの帰路』がその典型です。特に、同時代の芸術写真家と同様に郎の作品でも目立つのは、白黒のトーンを生かした水墨的な表現（No.3『春寒く野陰りて風景暮る』、No.4『趣のある山辺』）や、伝統絵画の視点を応用した俯瞰構図（No.7『華渓の塩工場』、No.9『筏と輝く波』）です。またNo.2『静観自得』やNo.15『絶壁をめぐる雲』は、紙ネガという技法で、素描や水彩画のような味わいを出しています。これらの郎の作品にも見られる雄大な風景への憧れは、やがて集錦という技法の開拓によって大きな展開を迎えます。

台湾時代



1949年、郎静山は共産党に征圧された上海を逃れて香港に渡り、翌1950年から台湾に定住します。上海に多数の写真機材やフィルムを残し、40年もの長い間大陸に戻ることがなかったため、台湾時代の郎の制作活動は大きな制約を受けることになります。

それでもこの時代には、上海時代のネガからのリプリントや再利用のほか、台湾ほか世界各地で撮影した写真を使った集錦、水牛や原住民(No.46『青春の顔』、No.47『舞影』)など台湾特有の風物を撮ったストレート写真、政治や文化の要人を含む肖像写真など、多数の作品を残しています。特に、フォトグラム(フィルムを使わずに物体を印画紙の上にのせて感光させた写真)による「影絵」(No.49『雪山』、No.51『林のなかの家』)、自作の模型による「盆景」(No.50『秋近し』)は、台湾時代からの新しい試みであり、ネガ合成による集錦とは異なる様々な手法で中国的な造形を追求し続けたことがわかります。

郎は、1953年に再興された「中国撮影学会」の理事長に就任して台湾における芸術写真の振興に力を尽くし、「撮影大師」と呼ばれて後進の写真家からも敬愛されました。また台湾写真の海外への紹介や、1966年に設立された「アジア影芸連盟(FAPA)」によって、アジア内の芸術写真家の交流にも貢献しました。日本でも1951年から個展を開催し、1970年にはFAPA名誉会長として来日し、日本の写真家とも交流を深めました。そのいっぽう、国民党政府による中国文芸協会や展覧会・出版物に協力し、中国美学を国内外に宣揚する役も担いました。

この時代でも郎作品の基本的な傾向は上海時代からの中国美学を受け継ぐものでしたが、世界各地への歴訪から、中国らしさにとらわれない超現実的な作品も生まれるようになります。世界各地で撮影した写真を組み合わせた最晩年のNo.24『湖山風景』では、時空を超えて異なる自然と文化が混ざり合い、現代のデジタル技術によるバーチャル・リアリティや、グローバルな文化の移動・流通を予見した作品ともいえるでしょう。

郎静山の「集錦」技法

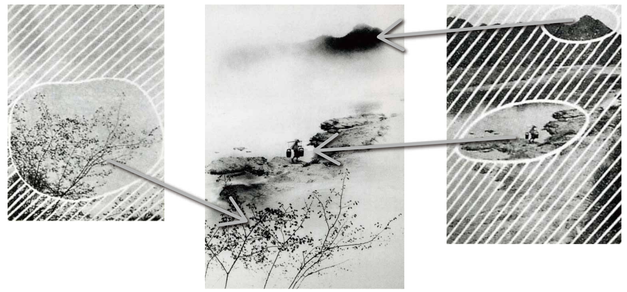
「集錦」とは、複数のネガから必要な部分だけを組み合わせて１枚のプリントに焼く合成写真の技法。英語ではcomposite photographyまたはモンタージュ写真というが、郎静山は、優れた絵画や詩文などを集めて編集したものを意味する「集錦」という語を使った。2枚のネガを合成した1934年の『春樹奇峰』(No.17)が最初期の集錦作品といわれ、集錦は郎作品の最も特徴的な技法として知られるようになる。

同様な合成技法は、ヨーロッパでも、古典的な絵画の題材や構図を模した19世紀の「絵画主義Pictorialism」写真や、異質なイメージを結合する20世紀初頭のダダイズムなどの前衛写真に見られる。しかし郎静山の集錦作品はこれらのヨーロッパの先例とは異なる美学から生まれた。ひとつのレンズを通して固定した単一の視点で切り取られた情景ではヨーロッパ的な遠近法を超えられないが、郎は、集錦技法によって、複数の視点から見た情景をひとつの画面に構成する「三遠法」や「散点透視法」などの伝統的な中国絵画に見られる空間を表現しようとしたのであり、それは中国伝統絵画の原理「画の六法」のひとつである「経営位置」を発展させたものともいえる。

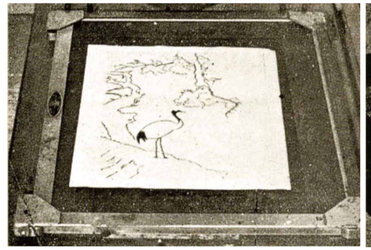
郎静山による集錦にはふたつの手法がある。第一は、ネガのプリントしたい部分の周囲を紅色の塗料で塗りつぶしてプリントする「塗紅法」(写真右上)であり、第二に、ネガの特定の部分だけを感光するように穴をあけた紙を微動させながら光にかざす「遮蔽法」(右図)である。どちらの場合でも、光や奥行きを自然に見せ、継ぎ目を目立たなくしながら統一的な構図を作るには、高度の技術や芸術的感性を必要とする。

塗紅法によるフィルム面での遮光

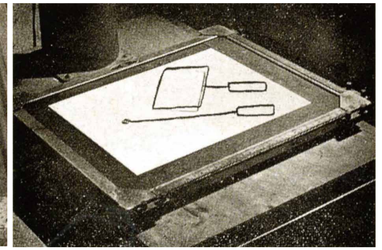
『清流、暁に汲む』(No. 23)



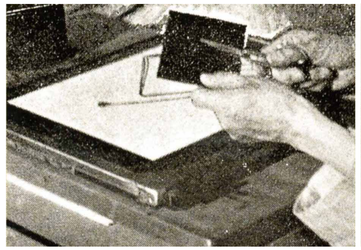
遮蔽法による集錦作業



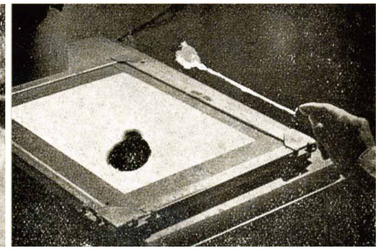
1 感光させる位置を決定するための下絵を描く



2 黒い紙を支えるため鉛の針金で作った道具を用意する

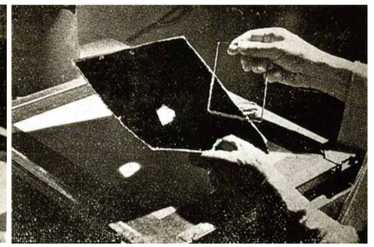


3 いろいろな形の黒紙を作る

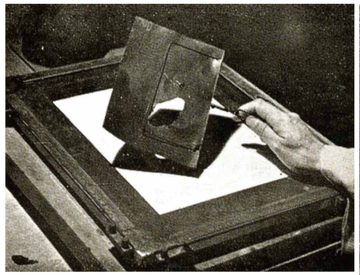


4 黒紙で遮光しながら８で焼く部分の周りを焼く

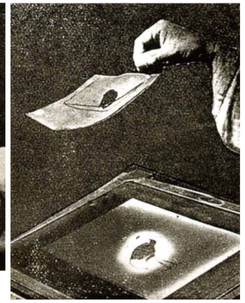
5 黒い紙に穴をあける



6 針金の枠を黒い紙に装着する

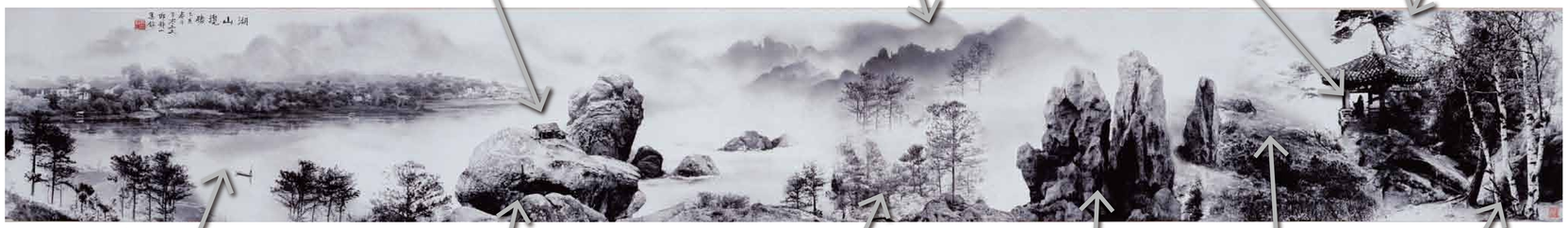


7 装着したところ



8 黒紙にあけた穴から光を通して必要な部分だけを焼く

『湖山風景』(No.24)



(周修平論文による)

郎静山年譜

1892	・8月4日、江蘇省清和県（今日の淮安）に生まれる。
1904	・上海の南洋中学予科に入学し、図画教師・李靖瀾の指導のもと、写真を始める。
1912	・上海の新聞『申報』営業部に入社。
1913	・YMCAの夜間部に通い、英語や広告を学ぶ。
1919	・「静山広告社」を設立。
1928	・「華社（中華撮影学社）」を創立、第1回展を上海の時報社で開催。
	・『時報』の写真記者に就任。
1929	・上海で開かれた「教育部全国美術展覧会（第1回全国美術展）」美術撮影部門に出品。美術撮影部門の審査員を務める。
	・上海中華美術刊行社から写真集『静山撮影集』を出版。
1930	・上海松江女子中学校の撮影選科教師に就任。
	・『新聞報図画副刊』の編集者に就任。
	・このころ、黄仲長、徐祖蔭と「三友影会」を創立。国外のサロン展に積極的に参加する。
1931	・「静山撮影室」を開設、肖像写真と広告写真を専門とした。
	・時報社で初個展。
	・日本写真連盟主催による「第5回国際写真サロン」で『柳池弄艇』が入選。
1932	・「三友影会」展開催。売上金を戦災者の救援のために寄付。
1934	・雑誌『美術生活』創刊し、編集を行なうとともに写真コラムを担当。
1935	・『春樹奇峯』[No.17]がアムステルダムのサロンに入選。以後、世界各地のサロンに34回入選。
1937	・家族とともに上海を撤退し、重慶近くの縉雲山麓の温泉寺に半年間滞在。以降、戦火を逃れて各地で多数の風景写真を撮影。
1938	・家族と別れて上海に戻る。
	・国民政府の賑済委員会（救済委員会）専員に就任。
1939	・香港のタイガーバーム・ガーデンで個展。
	・上海で個展。初めて集錦作品を展示。
1940	・西南地域に戻り、「重慶撮影学会」「昆明撮影学会」を創立し理事長に就任。
1941	・上海で開催した第14回個展にあわせて刊行された作品集で初めて「集錦照相（モンタージュ写真）」の言葉が登場する。
	・画報誌『良友』3月号、7月号の表紙に作品掲載。
	・モンタージュ写真の技法を論じた『集錦照相概要』を出版。
	・一家で上海に戻る。
1942	・英国王立写真芸術院から高級会士（FRPS）を、米国撮影学会から高級会士(FPSA)の称号を得る。
1943	・妻・雷佩芝、三女・郎毓賢と、写真と書画による展覧会を上海で開催。
	・台北総督府官房情報課による「第1回台湾登録写真家」展に出品。
1944	・上海で「郎静山夫婦国画撮影チャリティ展」を開催。
1945	・重慶国民党中央党部による対日戦争勝利記念パレードを撮影。
1946	・「出国前撮影展」開催。
	・『中国撮影』創刊号の表紙に作品掲載。
1947	・香港で個展。
	・アメリカで行われた世界の写真家50人を紹介する展覧会に出品。

1948	・「上海撮影会」の理事に就任。
	・『静山集錦』を刊行。陳萬里、張大千らの序文を掲載。
	・当時の台湾省政府の要請を受けて台北を訪問し中山堂で個展。
	・「中国撮影学会」の理事に就任。
1949	・9月、三男の郎毓俊、四男の郎毓彦を連れてアメリカ船に乗り上海を出発。
	・10月、香港着。
	・香港で「郎静山夫妻画影展」を開催。郎の写真と雷佩芝の中国画を展示。
1950	・1月、台湾基隆港に到着。
	・台北で「郎静山集錦撮影・所蔵近代名家書画南陽石刻拓片展」を開催。
	・英国王立写真協会主催の展覧会で最優秀賞を受賞。
	・総政治部設計指導委員会兼任設計委員に就任。
1951	・蔣介石と会見。
	・「中国文芸協会」写真部門の主任に就任。
	・「中国美術協会」の常務理事、出版組長に就任。
	・国民党史編纂委員会の編集委員に就任。
	・「郎静山写真個人展」を東京の松島屋ギャラリーで開催。
1952	・『アサヒカメラ』1月号に浜谷浩による郎の肖像写真と郎作品が掲載される。
	・『中華民国開国名人像』『黄花岡革命烈士画史』の挿絵を担当。軍の芸術工作隊に参加。
1953	・台北で「中国撮影学会」が復会。同年に台北に開廊した美而廉（メイアーレン）芸廊で1回目の大会を開催、理事長に就任する。（～94年まで）
	・マニラで個展を開催。
1954	・東京の小西六フォトギャラリーで「中国芸術撮影展」開催。
	・国民党政府発行の『反共義士奮闘史目録』でデザインを担当。
1955	・中華教育電影製片廠工場長に就任。工場のある板橋に移る。
1956	・国立歴史博物館研究委員に就任する。
1957	・国防部総政治部政治作戦計画委員会委員に就任する。
	・「台北撮影サロン」を創立し審査委員の一人に就任する。
1958	・香港で個展。
	・中英仏日の四か国語で『静山集錦作法』を出版。
1959	・台北第一女子中学で写真を教える。
1960	・フランス国際写真センターの会議に「中国撮影学会」が参加するためパリ訪問。マン・レイ回顧展を鑑賞、マン・レイに会い肖像を撮影。
1961	・「中国撮影学会」理事として来日。富士フォトサロンで「郎静山先生の集錦写真展」開催。開幕式に参加した張大千らと仙台・松島旅行。日本写真協会会長の春木榮宅訪問。
1962	・「中華民国芸術撮影展」が東京の富士フォトサロンで開催される。「中国撮影学会」理事として来日。
1963	・台北の台湾国立芸術学院（現国立台湾芸術大学）の教員に就任。
	・台北・国立歴史博物館で、「中国撮影学会」主催による「第1回中華民国国際影展」開催。『第1回国際サロン選輯』を出版。
1964	・韓国撮影学会、韓国芸術学会、漢城華僑学会の招きでソウルに滞在。韓国撮影学会の栄誉会員に就任する。

1965	・シンガポール中華総商会で個展。
1966	・金丸重嶺、春木榮らとともに台北で「アジア影芸連盟（FAPA）」を設立し理事長に就任。アジア各地から13の写真団体が参加。
	・韓国写真協会主催によりソウルで個展。
	・「第1回アジア撮影展覧会」が台北歴史博物館で開催される。
1968	・台北の中国文化大学の教員に就任。
1970	・「FAPA第3回大会」のため来日し、東京で講演。のち京都、大阪万博を見学。
1971	・中国文化大学華岡博物館で個展。
	・台湾中国学術院撮影研究所が郎自選の作品集『六十年撮影編輯』を出版。
1972	・「中国撮影学会」が『Photographic Works of Chin-San Long』を出版。
1973	・「中山文芸創作賞」を受賞。
1979	・オーストラリアの「メルボルン撮影協会」に招かれ講演。
1981	・パリ写真月間で個展、フランス国立図書館の版画・写真部に作品を寄贈。
	・台北歴史博物館で「郎静山九十撮影回顧展」開催。
1982	・卒寿を記念して一連のイベントが台湾で開催される。
1983	・アルルの国際写真フェスティバルに参加。回顧展をトゥールーズのシャトー・ドー市立ギャラリーで開催。
1984	・香港で開催された「中国撮影芸術作品展覧」に、『湖山風景』（No.24）を出品。
1985	・丹頂鶴の撮影のため札幌を訪れる。
1986	・上海美術館で「郎静山芸術作品展覧」を開催。
1987	・「中国撮影学会」が『静山集錦』を刊行。
	・「第10回FAPA東京大会」のために来日し講演。ニコンサロンで同大会記念の個展。のち京都、奈良を旅行。
1988	・台北市立美術館で「郎静山九七回顧展」開催。
	・「日本写真協会」より「国際賞」を受賞。
1990	・「中国撮影家協会」「中国当代撮影学会」「中国撮影家協会上海分会」が共同で中国撮影出版社から『撮影大師郎静山作品集』を出版。
1991	・息子の郎毓彬とともに40年ぶりに上海を訪問。のち本籍の浙江省蘭渓市を訪ねる。同市の文化館に「中国撮影大師郎静山事跡陳列室」が開設される。
	・北京・故宮博物院で「郎静山百齢百幅撮影作品展」を開催。
1992	・東京都写真美術館の「日本のピクトリアリズム」展の関連で郎作品が特別展示される。のち出品作品を同美術館に寄贈。
1994	・桜の撮影のため来日。
	・ドキュメンタリー映画『人間伝奇　走過一世紀的撮影大師郎静山』が台北市立美術館で初上映。
	・広東珠海で「第2回華人華僑撮影家討論会」に参加。
1995	・香港で展覧会。重い風邪をひく。
	・4月13日、台湾大学付属病院で病没。
2003	・福建省泉州市の華光撮影芸術学院新校区に「郎静山撮影芸術館」が開館。
2004	・ドイツのヴィラ・シュトック美術館での「上海モダン1919-1945」展に出品。
2008	・台北の国立歴史博物館で「年代風華―郎静山逝世13周年記念展」開催。
2011	・故郷の江蘇省淮安に「郎静山国際撮影芸術館」が開館予定。